

23. 大和田詠美 / 地球にイカを刺す

布、針金、ステンレス、他
重力に抗い立つ、というよりは空から落下した具合で
イカ11体を東飯田駅跡のフェンスに対し約66.6度、
地球の自転軸と同じ傾きで配置した。

24. 菅原二郎 / かまえ2022—H

黒花崗岩
この作品は切削された一定規格の黒花崗岩を12個組み合わせ、
中に空間のある直方体を作り、各面を彫り込んでいったものです。
一番苦労したことは表面積が多く、一日仕事をして今日一日
どこをやったのか解らないほど遅々として進みませんでした。

25. 山崎隆 / 二つの石

黒御影石
絵本作家アーノルドローベルのおはなし「TWO LARGE STONES」より
着想を得て彫刻としてみました

26. 高梨裕理 / 深遠の森-帰省

樺
2008年この場所にあるエノキの木に作品を展示した。畑を挟んだ公園の
樺が伐採され、それを譲り受け制作を開始した。14年間少しずつ制作し、
再びこの地で展示をする。作品は完成されていないが、樺を故郷に戻して
みることにした。

27. 津田大介 / 豊饒の巫女

樟
時代変化で二つの集落を一つの地区にする時に、各集落の神社もひとつに
された。その残された鳥居と小さな祠は、集落の人々の信仰心と愛着が
残された地域の記録。そこにも収穫祭の豊饒の巫女が現れた。

28. 山添潤 / 石の軀 2022

黒御影石
石を彫る 私の力は石の表面に刻まれ蠢きだす
失われていくもの と同時に 現れてくるモノ
石が抱える膨大な時間に 私が関わったわずかな時間を重ね合わせ
私が刻んだノミ跡と共に石の時間は新たに流れてゆく

29. 瀬川怜 / 雨引と、風と

鉄
雨引山から吹く風
気付けば僕を撫でて、また通り過ぎてゆく。
とても気持ち良く、少し感傷的にもさせてくれる。

30. 國安孝昌 / 筑波嶺の産土神の御座(みざ)2022

丸太、陶ブロック、単管
怪我のせいで、思うように身体が動かせない。今作は、リハビリを兼ねた作り
にならざるを得ない。筑波山を眺望する静かな雨引きの景観から、流れ
落ちる気をそっと受け包む作品を作りたいと願っている。

31. 島田忠幸 / 目指せ13m

アルミニウム、鉄、ステンレス
この作品は3体であるが、1体の作品です。大地を蹴る・空中を飛び・着地
する寸前・彼は世界新記録を目指しているようだ。別の言い方をデュシヤンの
階段を降りる裸婦を形象した作品です。

32. 大槻孝之 / ジグザグに空へ

鉄
今回、この場所に作品を設置することに決めた理由は、この場所が車の
往來する道からの眺めと、川沿いの土手からの眺めの変化がとても面白く
感じたからだ。地形からインスパイアされた作品である。

33. 村井進吾 / Stage - 光景

黒御影石
幕が上がる。

雨引の里と彫刻 2022

AMABIKI 2022

2022年10月10日(月)-12月11日(日)9:00-16:30
Mon.Oct 10th , 2022 — Sun.Dec 11th , 2022

作家のひとこと

Messages from Artists

雨引の里と彫刻 実行委員会

番号 作家名 / 作品名

素材

作家のひとこと

「作家のひとこと」はルートマップの作品番号順に掲載してあります。
展示作品とあわせてお楽しみください。

01. 松田文平 / backbone

白御影石

精神的支柱を表すbackboneを石で表現しました。

02. 平井一嘉 / かげろう

大理石

筑波山を背景に作品を置いてみたいと思いました。四角い石を意図的に割っても意図しない形に割れた石の偶然性を活かして凹凸に3点づつ繋がるようにした三角の内側をひたすら彫った先に何か見えるのか見たい。

03. 八十島海斗 / ひとつまみ

稲田石、筑波石

原石の一端をつまんでみた。元の姿より幾らか柔らかくなった気がします。

04. 志賀政夫 / 紅葉の食卓

アクリル、木、塗料

一人テーブルに附くと、爽やかな風の色が舞い降り始めます。

紅葉の食卓には、空の色と木々のささやきが聞こえてきます。

秋の精たちが踊り始めるのでしょうか。楽しい宴の始まりです。

紅葉の食卓・雨引にて

05. 白井英之 / 神様の涙

水、麻紐、フオグポンプ

世界では、多くの涙が流れ続けています。『神様の涙』と題したこの作品は、一粒一粒の水滴が陽の光を受け輝く作品です。水滴の中に光があるように、涙の中にも光があることを願います。

06. 小日向千秋 / 羽衣

鉄、漆、金箔

天から舞い降りた金の羽衣は木漏れ日を集めて森に光を放ちます。

07. 上田快 / ひかりのさしこむところ

鉄、石

光が差し込む空間を作りたいという思いで制作しました。

08. 望月久也 / 開・合

鉄

設置場所は、初出品以来気になっていたエリアである。

早、25年が経ち大和村は桜川市となり、この空間も変わった。

作品のタイトルに通じる思いは残り、置かせて頂いた。

09. 大栗克博 / 心の器

花崗岩

制作当初は、材料にした色違いの4個の石を強く意識した。作り進めながら2ブロックになり、凸と凹、相対する形を意識した。組み上げて1個となるころには、さまざまな多様性を受け入れる心の器が見えてきた。

10. 佐藤晃 / 大気の襷 VI

白花崗岩

集落の中の民家に隣接してポツカリと空いた風通しの良い一角がある。視線は木立や水田の奥を抜けて遠くの山並みや空へと広がりに心地よい。この場所を流れる大気の中をまさぐり光や風と戯れるように彫刻を試みる。

11. 塩谷良太 / 物腰

陶

わたしのなかの不穏な誰か。

12. 岡本敦生 / 「息を彫る - 2022」 “Sculpt a breath 2022”

玄武岩の玉石 + 他の石

地球は総体として、宇宙空間に浮かぶ1個の巨大な塊なのだが、その塊は間違いなく生きている。本来無機質であるはずの石の重心に向かって穴を開ける。そして二つの穴が石の重心で繋がった時、無機質だった石の塊が、ゆっくりと息をはじめ。その原始的な息吹を掘り起こしてみたいのだ。

13. サクサベウシオ / 支えられるモノ 2022

自然石、木枝、足場パイプ、針金

支えられるモノは重力に対抗して支えられているのだが、それも含めて全てのモノは、重力とバランスをとってそこに存在しているのである。

14. 西成田洋子 / 記憶の領域2022・タイランド

古着・鉄・靴・ぬいぐるみ・その他

幼い時、ぬいぐるみで遊んだ記憶はない。あまり、好きではなかった。

しかし、時を経てこうして作品の素材として使う日が来るとは。

15. ゼレナク・シャンドル / なごり

竹、和紙、ミクストメディア

いつも行きたいのに行けていない場所。

夢で見た、上下が逆で、実在するものとは異なる、夢のなごりとして。

16. 岡孝博 / タイの香

レール(鉄)、擬宝珠(木)

2019年にタイに行った。首都バンコクとアユタヤだ。

花の入公園のこの施設に縁を感じレールとタイバビリオンの擬宝珠を組み合わせタイの香を表現した。

17. 山本憲一 / 剪定季 2022 TC

白御影石、木材、塗料、異形SUS

構築物を選定してみる。物の形は構築打設あるいは解体であるかの中庸な形を公園屋の1つとして表現しました。

18. 洞山舞 / Phase

鉄

木々の余白 かすかな光 淡い影

時事刻々とゆらぎ 重なる 光と影

19. 海崎三郎 / 庭の一日

鉄、塗料

光の空から光のままひらひらと落ちてきて

繰り広げられる点と隙間の美学。

過ぎてしまう前に、私はこの途中という時間を捕まえてみたい。

20. 鈴木典生 / 花舞台

白花崗岩、土

ゲートボール場として使われていたこの場所は、加波山を背景にあたかも舞台を思わせる空間になっている。舞台袖には春を彩る桜の木、秋を彩る銀杏の木、日本の四季を楽しめるその舞台中央に花を咲きほこらせる。

名もない石の花たちは、この地の豊かさを演じる

21. 渡辺治美 / Root

赤御影石

植物を地を支えるたくましい根。それが深い穴の中から噴き上がる。

そしてうねり、流れ出す。そこに命の源を感じる。

22. 戸田裕介 / 水土の門／華甲の舞い

伊達冠石(だてかんむりいし)、ステンレススチール

豪壮な長屋門の前に鎮座する老ケヤキ。おおきな空洞を抱きかかえながら今年も力強く新緑を芽吹いた。この土地で何百年も人々を見守ってきた霊木の御前で、私にとって最初で最後の華甲(かこう)を舞う。